

水稲品種「にじのきらめき」の 高品質安定多収栽培方法

農業総合センター農業研究所

水稲栽培では、イネ縞葉枯病による減収や夏季の高温による玄米外観品質の低下が問題となります。国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構が育成した水稲品種「にじのきらめき」は、イネ縞葉枯病抵抗性を持ち、収量が多く、高温耐性に優れ、玄米外観品質が良く、粒が大きいという特徴があります。本県における作付面積は今後も拡大が見込まれることから、「にじのきらめき」の収量・品質を安定的に確保するための栽培方法を明らかにしました。

移植の適期

移植時期について、4月下旬及び5月中旬は、6月上旬よりも収量が1～2割多くなります(図1)。加えて、5月中旬移植は検査等級が概ね1等であり、他の時期と比較して千粒重は最も重く、米粒が大きくなります。一方、4月下旬の移植では検査等級が低下する傾向があり、全移植時期の中で最も米粒が小さくなりました。これらのことから、5月中旬の移植が本品種に適しています。

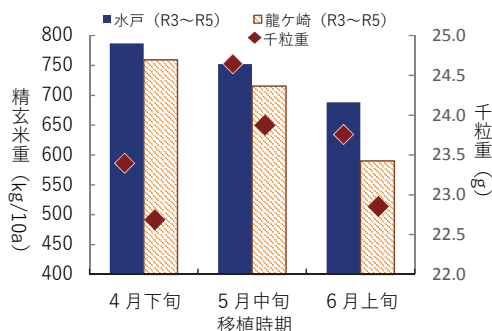


図1 移植時期の違いが「にじのきらめき」の収量に及ぼす影響

注) 栽植密度: 坪50株、施肥量: 基肥9kgN/10a、追肥3kgN/10a、追肥は出穂前25日を目安に施用

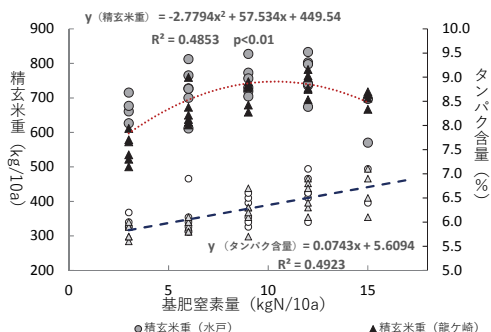


図2 基肥窒素量の違いが「にじのきらめき」の収量と玄米粗タンパク含量に及ぼす影響

注) R3～R5の結果。栽植密度: 坪50株、移植時期: 5月中旬、施肥量: 基肥9kgN/10a、追肥3kgN/10a (出穂前25日頃)

基肥窒素量の適正水準

収量が最大となる基肥窒素量は、回帰式より10kgN/10aです(図2)。この施肥量は、「コシヒカリ」慣行施肥量に対して1.6倍に増肥した水準です。この施肥量における玄米粗タンパク含量は、回帰式より6.4%であり、目標値を達成できると試算されます。なお、基肥窒素量3～15kgN/10aの範囲では、倒伏はほぼ見られません(倒伏程度0～1)。

にじのきらめき導入による所得の向上

「コシヒカリ」と飼料用米を各10ha作付けする20ha規模の水稲経営体において、「コシヒカリ」から「にじのきらめき」に転換する場合、その導入面積が3ha以上で経営体の所得が10%以上向上すると試算されます(表1)。

表1 20ha規模の水稲経営体における「にじのきらめき」の導入効果

用途	品種	面積: ha、単収: kg/10a、所得: 千円					
		導入前			導入後		
		面積	単収	所得	面積	単収	所得
主食用	コシヒカリ	10	510	3,022	7	510	2,116
主食用	にじのきらめき	0	710	0	3	710	1,641
飼料用	夢あおば	10	700	3,816	10	700	3,816
合計		20	-	6,838	20	-	7,573

注) 販売単価: 「にじのきらめき」10,860円/60kg、「コシヒカリ」11,760円/60kg、「夢あおば」420円/60kg
 肥料費: 基肥(2,893円/20kg、オール14)、追肥(1,158円/20kg、NK-C6)
 その他経費: 農林水産統計(令和3年産農産物生産費(組織法人経営))のうち、経営規模20ha以上
 平均値の生産費から肥料費を差し引いた値
 「夢あおば」のみ、水田活用の直接支払交付金(105,000円/10a)が所得に含まれる